

限界突破

キャンプ

Break through Camp!



「自己肯定感を高め、何事にも
自信を持って取り組める子供の育成」を
目指した取組!



令和元年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	松村 純子
次長	鈴木 昭博
主任企画指導専門職	梁河 昌彦
事業推進係長	横山 直樹/田村 文明/塩原 基寧/奈良 貢
総務係長	福岡 公平
管理係長	山川 晃/山下 順子/大工原仁志/吉田 賢/阿佐美幸子/小林 恵
	吉田 真祐
	鈴木 和子/戸田みどり
	齋藤 勇一
	岡 一成/佐藤 順彦/寺田 里美

青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」(文部科学省委託事業)

令和元年度 教育事業
○限界突破キャンプ 事業報告書○

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27
TEL : 027-289-7224 FAX : 027-289-7226
Email : akagi-kikaku@niye.go.jp
URL : https://akagi.niye.go.jp/

はじめに

「限界突破キャンプ」の2年目にあたり、今年度は文部科学省の委託事業（青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」）に採択されました。

青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」では、自己肯定感の向上に有効な体験活動について効果を検証することが求められています。そのため、体験活動推進プロジェクトの実施においては、①推進会議の開催 ②事業内容を工夫したモデル的な事業の実施 ③アンケート調査の実施の3点が示されています。

事業内容を工夫したモデル的な事業の実施として、「限界突破キャンプ」は、本年度以下のように工夫・改善しました。

- ・1年目は、特にステージを設けていませんでしたが、2年目は、各ステージのテーマを設け、テーマに沿ったねらいを参加者に提示しました。
- ・榛名山登山については、1年目は照り返しのきつい公道を歩く行程となり、熱中症が心配されましたので、2年目は、公道はバスを利用し登山道のみを歩くことにしました。
- ・1年目は、ボランティアを希望する学生が少なく、3名の学生が班付きリーダーとして関わりましたが、2年目は、ボランティア募集を早めることにより、班付きリーダーの他にキャンプ全体のサポートも含めて6名の学生が本事業に関わりました。

また、3年目を見据えて、2年目の今年度から、県立妙義青少年自然の家の職員に推進委員をお願いし、「限界突破キャンプ」を単年度事業として捉えるのではなく、本事業を3年間のストーリーとして考えることができました。

今後は、「2年目の課題」を最終年度につなげていきたいと思えます。

本報告書が、長期自然体験事業を実施する青少年教育施設の皆さんに少しでも活用していただけることと、青少年の体験活動の推進を助ける一助になることを願っています。

最後に本事業を推進する為に協力いただきました推進委員の皆様がこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子

目次

はじめに

1. 限界突破キャンプ事業の推進

(1) 趣旨	01
(2) 実施概要	01
(3) 推進委員会の概要	02
①委員の構成	02
②委員会の日程と議事内容	02

2. 限界突破キャンプ事業の内容

(1) 日程	03
(2) プログラムデザイン	04
(3) 自己評価・相互評価・振り返り	05
(4) 安全管理・プログラム実施体制・持ち物装備	07
(5) 各ステージの内容	08
①【ファーストステージ】 出会いのステージ	08
②【セカンドステージ】 仲間作りのステージ	08
③【サードステージ】 挑戦のステージ	09
④【ファイナルステージ】 旅立ちのステージ	11

3. 調査結果

(1) 自己肯定感とやり抜く力の変容	12
(2) 参加児童の変容	13
(3) 援助規範意識・ボランティア活動継続動機および自由記述に関する結果および考察	15

4. 事後のアンケート結果

(1) 1か月後の参加者アンケート結果	16
(2) 1か月後の保護者アンケート結果	16

5. 成果と課題

(1) 成果	17
(2) 課題	17
(3) 推進委員より	18
(4) 事業担当・ボランティアより	19

1. 限界突破キャンプ事業の推進

(1) 趣 旨

教育再生実行会議の第十次提言において、我が国の子供たちの自己肯定感の低い状況の改善が重要であると、国全体で取り組むべき事項とされている。自己肯定感をバランスよく育むためには、自然体験活動などの様々な体験活動を通じて、達成感や成功体験等を得るとともに、失敗や挫折を経験したときに、自分を受け入れ、課題に立ち向かう姿勢を身に付けることが重要である。

そこで、国立赤城青少年交流の家では、上毛三山のうちの二山である赤城山（地蔵岳・長七郎山・鈴ヶ岳・鍋割山・黒檜山・駒ヶ岳・荒山高原）と榛名山（掃部ヶ岳・榛名富士）の自然を舞台に、7泊8日の遠征型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育むことをねらいとした。この力を育むためには、子供たちに負荷をかけ、仲間と共に「挑戦・協力・発見」という体験を積み重ねることが大切であると考えた。

この事業をより推進するためには、職員だけで企画するのではなく、県内外の様々な機関と連携し、実施することが必要であり、今年度も「推進委員会」を設置し、企画の段階で外部から3名の委員の先生方にご意見を頂き、事業運営に反映させることができた。

(2) 実施概要

●期 日

【事前キャンプ】令和元年7月13日（土）～14日（日）（1泊2日）

【本キャンプ】令和元年8月3日（土）～10日（土）（7泊8日）

●参加者

【対象】小学5年生～中学2年生 23名（男子17名、女子6名）

【内訳】小学5年生：6名 群馬県：18名
小学6年生：10名 栃木県：2名
中学1年生：3名 東京都：2名
中学2年生：4名 千葉県：1名

●班編成

- ・1班5～6名で4班に編成（異年齢集団）
- ・各班にボランティアスタッフ1名ずつ配置

●スタッフ

- ・国立赤城青少年交流の家職員：4名
- ・ボランティアスタッフ：6名（班付き4名、管理2名）
- ・群馬県立妙義青少年自然の家職員：1名（事前キャンプ）

(3) 推進委員会の概要

①委員の構成（推進委員4名）（五十音順）

委員長：国立赤城青少年交流の家 所長	松村 純子
國學院大學人間開発学部 准教授	青木康太郎
群馬県立妙義青少年自然の家 社会教育主事	青山 裕也
群馬大学教育学部 准教授	岩瀧 大樹

②委員会の日程と議事内容

○第1回推進委員会 5月21日（火）

（推進委員の役割）

- ・岩瀧委員には、広報やボランティアの意欲向上の助言。青山委員には次年度の企画運営や群馬県立妙義青少年自然の家との連携。青木委員には自己肯定感向上に関する調査を依頼。

（実施案検討）

- ・今年は登山を中心にしたキャンプで、ステージごとにねらいをもとに取り組み、それが達成できたかふりかえる場を設ける。また、そこでは翌日の目標をしっかりと持たせる。
- ・猛暑や台風など場合の代替プログラムをしっかりと考えていくことが必要。

（調査検討）

- ・自己肯定感を上げるには、人との関わりが大事。小学校高学年と中学生では声かけが違うので、カウンセラーにその部分をしっかりと指導することが大事。
- ・キャンプの成果をどう家庭や学校で生かしたかも知りたいので、一ヶ月後のアンケートも、しっかりと取ってほしい。

○第2回推進委員会 10月30日（水）

（事業報告）

- ・全員無事に最後までやり遂げることができた。また、群馬テレビにもその様子が3回に分けて放送された。

（アンケートの分析）

- ・参加者のアンケートでは自分のがんばりを褒められた体験が多いほど、自尊感情ややり抜く力の数値が高くなるという結果が出た。
- ・ボランティアの良かった点としては子供の背中を後押しするような声をかけることができた事と挙げていた。課題点として、野外炊事やテント設営など細かな指示ができなかったと挙げていた。しかし、課題点もスタッフ同士で協力して解決するなど、キャンプを通してボランティア自身もコミュニケーションの大切さを学んでいた。

（報告書の構成案）

- ・最初は弱音ばかり吐いていた子が、仲間やスタッフの励ましにより、最後は前向きに声をかけながら登山を続けられた。こういう個人の変容も報告書に載せられると良い。

○第3回推進委員会 2月18日（火）

（事業のまとめ・報告書の確認・来年度の日程案）

- ・全国の青少年施設へ報告書を送り、普及を図るとともに、その報告書の成果や課題をふまえて、来年度の実施案を作成していくと良い。

2. 限界突破キャンプ事業の内容

(1) 日程

① 事前キャンプ

4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 7/13 (土)																		交流の家
受付 ※保護者7名参加 事前説明会 オリオン登山日記 アンケート 保護者面談 昼食 あかぎアドベンチャープログラム 入浴 夕食 かなな著作登山講義(安全管理) 就寝																		
2日目 7/14 (日)																		交流の家
起床 荷物整理 朝食 清掃 退所点検 赤城不動大滝散策(昼食~弁当) 解散																		

② 本キャンプ

4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 8/3 (土)																		交流の家
受付 開会式 アイスブレイク 昼食 チーム旗作り 野外炊事(カレー) 入浴 登山講義(地図読み) 振り返り 健康観察 就寝																		
2日目 8/4 (日)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 鍋割山(1,332m)登山・荒山高原<総距離約14km> 休憩 荷物整理 入浴 夕食 振り返り 健康観察 就寝																		
3日目 8/5 (月)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 昼食関係 バス移動 掃部ヶ岳(1,449m)・榛名富士(1,391m)登山<総距離約10km> バス移動 休憩 荷物整理 入浴 夕食 振り返り 健康観察 就寝																		
4日目 8/6 (火)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 洗濯 野外炊事(BBQ) フォトフレーム作り テント設営練習 入浴 夕食 振り返り 健康観察 就寝																		
5日目 8/7 (水)																		赤城山分校
起床 健康観察 荷物整理 朝食 昼食関係 バス移動 鈴ヶ岳(1,564m)・地藏岳(1,674m)・長七郎山(1,579m)登山<総距離約18km> テント準備 入浴(書水旅館) 野外炊事(キーマカレーなど) 振り返り 健康観察 就寝																		
6日目 8/8 (木)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 昼食関係 黒檜山(1,828m)・駒ヶ岳(1,685m)登山<総距離約8km> テント片付け バス移動 休憩 荷物整理 入浴 夕食 振り返り 健康観察 就寝																		
7日目 8/9 (金)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 朝食 キャンプのまとめ・発表 昼食 パーティ準備 お別れパーティ(野外炊事) お別れパーティ(キョウマパーティ) 入浴 振り返り 健康観察 就寝																		
8日目 8/10 (土)																		交流の家
起床 健康観察 荷物整理 朝食 清掃 退所点検 振り返り(アンケート等) 開会式 解散																		

(2) プログラムデザイン

【ステージについて】

全体のねらい達成に向け、キャンプを4つのステージに分け、ステージごとのねらい、活動のポイント、スタッフのかかわり方について明確にし、キャンプを実施した。

日程 / ステージのねらい / 活動プログラム / 活動のポイント / スタッフのかかわり方

【ファースト】 出会いのステージ

7/13	本キャンプに向けて、新しい仲間と共に協力して取り組んでいこうという意欲をもつ。	参加者・保護者説明会 仲間作り かなな著作登山講義	<ul style="list-style-type: none"> 本キャンプに向けて、必要な心構えや道具の準備を自分なりに考える。 初めて出会う仲間と様々な活動に進んで取り組む。 様々な活動を通して、仲間の特徴を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 子供たちの緊張をほぐすために、笑顔で接し、明るく元気に前向きな態度で接する。 基本的な生活習慣(早寝早起き朝ごはん)や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などについて指導し、意識付けを行う。 個人の特徴(人のかかわり方などの性格)をつかみ、記録を取る。
7/14		赤城不動大滝散策		

【セカンド】 仲間作りのステージ

8/3	グループの仲間同士で、お互い励まし合い、支え合いながら登山に取り組もうという意識をもつ。	開会式 仲間作り 野外炊事 登山講義	<ul style="list-style-type: none"> キャンプ生活に必要な様々な知識、技術を身に付ける。 様々な活動を通して、チームの仲間とかわり合い、他者を含め合いながら活動に取り組む。 チームの仲間を助けたり、助けられたりすることで仲間の良さに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> チーム旗作りや振り返りカード、All for One(一人のために)への記入の仕方を指導し、継続的な振り返りを充実させる。 野外炊事などのキャンプ生活に必要な基礎知識や技術を伝え、手本となる。 個々の緊張を和らげ、チーム内でお互いのかかわりが生まれるようにする。
-----	--	--------------------	---	---

【サード】 挑戦のステージ

8/4	目標に向かって、仲間と共に協力しながらやり遂げることで、最後まであきらめずに挑戦しようという気持ちをもつ。	鍋割山登山 荒山高原	<ul style="list-style-type: none"> 困難な状況においても、自分で考え、チームの仲間と話し合いをしながらあきらめずにやり抜く。 チームの中での自分の役割を理解し、その役割を果たす。また、助けが必要な場面適切に仲間を助け、お互いに協力して活動に取り組む。 チームの仲間の励ましや助けがあってもやり抜いたことを実感し感謝する。また、やり抜いた自分の頑張りに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 登山ルートでは、安全の確保は徹底するが、直接的な手助けは行わず、仲間同士での助け合いを見守る。 子供の体力的な様子に目を配り、体調の変化の把握に努める。 子供たちの挑戦を積極的に励まし、認め、一人一人の意欲を高める。 子供たちの人間関係について実態把握し、スタッフ間の連絡を密にして支援する。 振り返りの時間では、他者の良さや頑張りを見守るようになり、一人一人が他者から認められる経験を経験することができるようにする。 危険行為や全体の約束事から外れるなど、悪いことには毅然とした態度で対応する。
8/5		掃部ヶ岳登山 榛名富士登山		
8/6		洗濯 野外炊事、フォトフレーム作り、テント設営練習		
8/7		鈴ヶ岳登山 地藏岳登山 長七郎山登山		
8/8		黒檜山登山 駒ヶ岳登山		

【ファイナル】 旅立ちのステージ

8/9	全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考えていく。	キャンプのまとめ お別れパーティ	<ul style="list-style-type: none"> 自分以外の助けや支えを意識しながら、自分の言葉で感想を伝える。 チームの仲間と過ごした日々を振り返り、これからも仲間を大切にしていこうという気持ちをもつ。 最後までやり抜いた自分を見つめ、成長を実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンプスタート時の頃の自分を想起させ、やり抜いたことに対する自信を持たせる。 子供たちの主体的な活動を見守る。 キャンプを通して学んだことを、今後の人生にどのように生かしていきたいか、しっかりと考えさせる機会を充実させる。 これからも、何事にも自信を持って取り組むよう言葉をかける。
8/10		開会式		

(3) 自己評価・相互評価・振り返り

本キャンプでは、活動による体験をより深める手立てとして、次の5点に取り組んだ。

- ① 内省を促し、個人的な目標を設定する「ふりかえりカード」
- ② 仲間に認められる機会を作るとともに、客観的に自分を確認する「All for Oneカード」
- ③ 班のメンバーで目標を共有する「チーム旗」
- ④ キャンプでの体験を総括し今後に生かす方法を考える「キャンプのまとめ」
- ⑤ キャンプのまとめをもとに自分の考えを表現する「決意表明」

1 ふりかえりカード〈每晚〉

「限界突破キャンプ」ふりかえりカード
8月 7日(水) 氏名()

(1) 今日の活動をふりかえって、エピソードを書いてみましょう。

① 挑戦したこと
岩登り用ロープを使って登り切った。

② 協力したこと
おぼろげな道を歩いてきのう挑戦した「ボジツグ」シンボルを写ることができたし、張り合えた。

③ 発見したこと
AVA高、カンチカ、おぼろげのスピードについていけたこと。

(2) 今日の感想を書きましょう。

おぼろげの道が1つきの倍の重さになって、11月の倍以上にがんばらなければならなかった。明日は山城で一番高い山に登るので、11月までいこうと気持ちを上げる。

(3) 明日のめあてを書きましょう。

最後に登る山は、11月まで登る！
楽しんで登る！

家でも1日目、どうだったか？ 手紙の返事を「おぼろげの道」うまく歩けたら、明日、カンチカ、おぼろげの道。

2 All for Oneカード〈每晚〉

All for One カード 8月 4日

今日の活動を通して、班の仲間にしてもらって嬉しかったことや、班の仲間の良いと思ったところをお互いに伝えよう。

氏名: つかれているとまに言葉しかけてくれたことに感謝した。	氏名: 751のにかんはらついてくれたと思った。
氏名: いかに道が険しいか分かった。	氏名: なんか笑わせてくれたり、おぼろげを引っ張ってくれた。
氏名: おぼろげの前を歩いてくれたので、自分も頑張れたので、すてきな思い出でした。	氏名: 大丈夫とばかり「がんばれー」って、いろいろたくさん、うれしく感じる言葉を言ってくれて、とてもうれしかったです。
モソロ— おぼろげのメンバーが、おぼろげの道。	つかれているとまに言葉しかけてくれたことに感謝した。

3 チーム旗〈初日・随時〉



班のルールと目標を記入。本キャンプ初日に作成し、毎日の振り返りの時間など、随時書き加えられるようにした。登山時も携行。

5 決意表明〈8日目〉



参加者・スタッフ・保護者 앞에서1人ずつ発表。

4 キャンプのまとめ〈7日目〉

キャンプのまとめ (8月9日) 氏名

このキャンプであなたが経験したことや、今あなたが感じていることをまとめよう。毎日の「ふりかえりシート」や「All for Oneカード」、チームで作った旗も参考にしてください。

(1) このキャンプで、あなたが目標にしていたことは何ですか。
このキャンプを通じて、自分に得意とするものができるといって、仲間と協力をすることの大切さ。

(2) このキャンプ中のできごとで、心に残っていることは何ですか。
鈴ヶ岳に登るときに、自分自身もキツいはずなのに、後ろの人から声援を送ってくれて、とても元気になって最後まで登ることができた。

(3) このキャンプで学んだことは何ですか。
・1人じゃ乗り越えられない事も、仲間と協力することで、できるよになるよということ。(大切さ)
・1人の意見ではなく、全員の見解に大切さがあるよ、まよわなくていいよ。

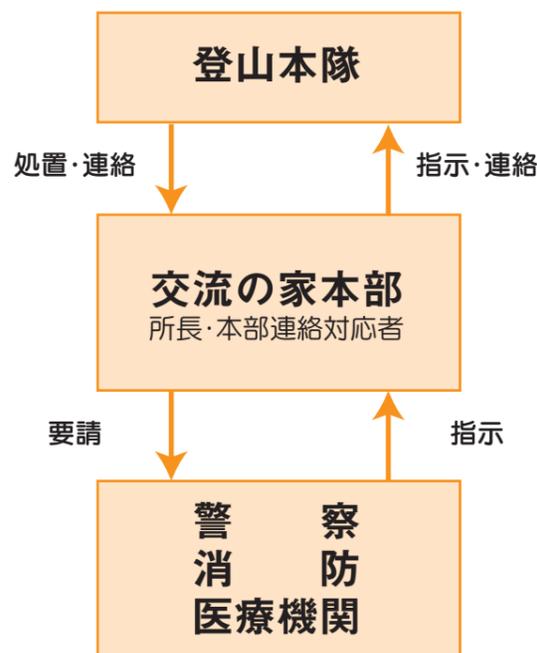
(4) このキャンプの経験を、今後どのように生かしたいですか。
自分1人じゃ乗り越えられないことか、あっても、仲間と協力する。学校などで、自分から、積極的に関わり、声をかける、協力することへの大切さの呼びかけ。

(4) 安全管理・プログラム実施体制・持ち物装備

登山時の安全管理

- ①交流の家の担当職員全員で全山の実踏を行い、想定される危険について共有した。
- ②ボランティアスタッフの事前研修で実踏を行うとともに、登山の安全管理について講義を行った。
- ③参加者の事前キャンプでハイキングを行うとともに、安全な登山の方法について講義を行った。
- ④登山本隊では参加者6名の班につき1名のボランティアスタッフが対応するとともに、最低4名の職員・ボランティアスタッフを隊列の前後および中間に配置した。
- ⑤気象条件ごとの対応を事前に設定し、実施当日の気象情報の収集を行った。
- ⑥緊急対応フローチャート(右図)を設定し、必要な際に参照できるようにした。

緊急対応フローチャート



登山時の服装

- 帽子
- 靴下
- 速乾性Tシャツ
- 登山用の靴
- 長袖シャツ ※日差しや風をさえる用途。着脱しやすいものがよい。
- 長ズボン

登山時の持ち物(指導者)

- FAセット
- 無線機
- エマージェンシーシート
- 携帯電話
- 熊撃退スプレー

登山時の持ち物(参加者)

<参加者持参>

- リュックサック (25~40L)
 - 水筒 (1L程度)
 - ハンカチ・ティッシュ
 - 筆記用具
 - 雨具(合羽)
 - 軍手
 - タオル
 - ヘッドランプ・電池
 - 腕時計
 - 虫除け
 - 虫刺され薬
 - 日焼け止め
- ※○は必要に応じて持参

<配布物>

- 弁当
- 行動食
- スポーツドリンク (500mL)
- コンパス
- 地図

<班装備>

- 水用ポリタンク (2L×2)
- 経口補水液 (500mL×4)
- 塩分補給用飴
- 熊鈴
- 簡易トイレ

(5) 各ステージの内容

【ファースト】出会いのステージ

① ファーストステージのねらい

本キャンプに向けて、新しい仲間と共に協力して取り組んでいこうという意欲をもつ。

7月13日 事前キャンプ

参加者・保護者説明会・仲間作り・かな箸作り・登山講義



2019年7月13日、事前キャンプ当日、参加者が国立赤城青少年交流の家に集まりました。初めて出会う仲間たちと顔を合わせ、不安や緊張を浮かべていた参加者の表情が仲間作り(あかぎアドベンチャープログラム)を行うことで、次第に笑顔が増えていきました。お互いの特徴を知ったことで、これから共に協力して取り組んでいこうという意欲をもつことができました。

【ふりかえりカードから】

〈挑〉…挑戦 〈協〉…協力 〈発〉…発見 〈相〉…All for One

- 〈挑〉事前説明会や登山講義などを受けたことで、本キャンプに向けての準備が十二分にできた。(中1男)
- 〈協〉友達ができるのが不安でしたが、仲間作りなどで関わったことで、たくさんの人と仲良くなった。(小5男)
- 〈発〉知らない人と一緒に関わることは苦手ですが、仲間が声をかけてくれたので、楽しくできたと、仲間のことを知ることができた。(小6男)
- 〈相〉スタッフの方から、積極的に話しかけてくれたり、相談にも乗ってくれたりしたので、とても嬉しかった。(中2女)

7月14日 事前キャンプ

赤城不動大滝散策

前日に、安全管理を含めた登山講義を実施したことで、体調管理や登山中の約束事など、安全第一での登山を心がけている姿が多く見られました。本キャンプに向けて、準備しておかなければいけないことをしっかりと聞き、本キャンプへの期待を胸に事前キャンプを終えることができました。



【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉登山中の危険なところや落石時などに必要な合図の勉強をしたことで、仲間との協力や助け合いが必要であるということがわかった。(小6男)
- 〈協〉登山中、みんなで「~が危ない!」などと伝言して伝えることができた。(小5男)
- 〈相〉スタッフの方は、できるだけ自分たちで考えられるようにしてくれた。(中2男)

【セカンド】仲間作りのステージ

② セカンドステージのねらい

グループの仲間同士で、お互い励まし合い、支え合いながら登山に取り組もうという意識をもつ。

8月3日 開会式

仲間作り・チーム旗作り・野外炊事・登山講義



本キャンプ、いよいよ開会式が始まりました。事前キャンプの時から比べると、一回りも二回りも成長しているように感じました。また、これから始まる7泊8日への期待と不安が緊張しているようでした。本キャンプの活動班が発表され、同じ班の仲間たちと交流を深めました。チーム旗作りでは、班ごとにデザインを考え、一人一人の思いや班全体の目標などについて書くことができ、お互いのことをより知ることができました。班のメンバーと最初の夕食作り(野外炊事)では、自分たちで役割分担をして準備から片付けまでしっかりと行いました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉年下の子に、野外炊事の方法などについて教えることができた。(中2男)
- 〈協〉チーム旗作りで意見を出し合うことができた。(小6男)
- 〈発〉事前キャンプで話をしなかった人と話したら、色々な良さに気づくことができた。(中2女)
- 〈相〉たくさん声をかけてくれてとても嬉しかった。(小5女)

【サード】挑戦のステージ

③ サードステージのねらい

目標に向かって、仲間と共に協力しながらやり遂げることで、最後まであきらめずに挑戦しようという気持ちをもつ。



8月4日 登山

鍋割山・荒山高原

登山1日目。交流の家～鍋割山・荒山高原～交流の家までの距離約14km、累積標高差約800mの道のり。初めの山ですが、急勾配のある難所がいくつもあり、途中弱音を吐く仲間に対して、励ましの声をかける姿が見られました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉少し遅れている子がいたら「頑張れ！」などと声をかけることができた。(小6男)
- 〈協〉みんなで危ないことや気をつけたほうがいいことについて、教え合いながら取り組むことができた。(中2女)
- 〈発〉仲間からの声かけがあったおかげで、とても気持ちが良い頂上に登ることができた。(小5男)
- 〈相〉様々な場面で「大丈夫？」などと言ってくれて嬉しかった。(小6女)

8月5日 登山

かもんがたけ
掃部ヶ岳・榛名富士

登山2日目。掃部ヶ岳～榛名富士までの距離約10km、累積標高差約700mの道のり。各班、チームごとの行動ということで、どの班も途中、何度も足を止めて、話し合います。班がバラバラになることもありましたが、仲間のペースに合わせて、全員でゴールすることができました。



【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉昨日より、仲間のことを応援できるようになった。(小5男)
- 〈協〉水分がなくなった仲間に、適時補給することができた。(中1男)
- 〈発〉身体の痛みがあったけど、仲間が声をかけてくれたことでやり切ることができた。(小6女)
- 〈相〉チームの仲間のペースに合わせて歩いてくれた。(小6男)



8月6日 休息日

洗濯・野外炊事・フォトフレーム作り・テント設営練習

身体と心を休める休息日。1日ゆっくりと過ごすことができました。班での活動は4日目、洗濯や野外炊事、テント設営練習など、仲間とかわり合い、お互いを認め合いながら協力して活動に取り組む姿が見られました。思い出作りとして、フォトフレームを作製し、参加者同士でサインを書き合うなどの様子が見られました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉野外炊事では、仲間の動きを見ながら、自分で考え、足りないところを手伝うことができた。(中2男)
- 〈協〉洗濯中など、空いている時間に何をするか、みんなで話し合いながら活動を進めることができた。(小6男)
- 〈発〉休息日を過ごしたことで、周りの友達の違う一面を知ることができた。(中2女)
- 〈相〉火おこしの方法を教えてくれた。(小5男)

8月7日 登山

鈴ヶ岳・地藏岳・長七郎山～赤城山分校



登山3日目。鈴ヶ岳～地藏岳～長七郎山までの距離約18km、累積標高差約1,000mの道のり。3つの山ということで、今までと比べると、途中に休憩を多くはさみながら、ゆっくりとした行程です。長い道のりで疲れもピークでしたが、全員で、そして班ごとに笑顔で声をかけ合いながらやり遂げることができました。

夜は、赤城山分校(テント泊)に一泊。仲間とテントを設営し、会話を弾ませながら過ごしていました。翌日早朝の赤城山最高峰アタックに備え、しっかりとご飯を食べ、早めの睡眠をとりました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉これまでは、自分のことで精一杯だったけど、3つの登山の中で応援をすることができた。(小6男)
- 〈協〉仲間と決めたポジティブな声かけを守りながら、取り組むことができた。(中1男)
- 〈発〉仲間からの励ましの声かけなどがあったことで、自分の限界を超えることができた。(小5男)
- 〈相〉登山中、辛い時にポジティブな声をたくさんかけてくれた。(小6女)



8月8日 登山

くろびさん
黒檜山・駒ヶ岳

登山最終日。黒檜山～駒ヶ岳までの距離約8km、累積標高差約500mの道のり。赤城山最高峰の黒檜山山頂を目指します。一人一人が自分だけではなく、班の仲間やそれ以外の仲間にも、積極的に大きな声で励まし合いながら、全員で最後まであきらめずに登ることができました。登山をやりきった気持ちを仲間と分かち合い、達成感でいっぱいになりました。

最後、駒ヶ岳から県立赤城公園ビジターセンターまで歩き、ついにゴールです。参加者とボランティアスタッフ、職員全員一列になって、手をつなぎながら最後の一步を踏み出しました。総距離約50km、累積標高差約3,000mの長い旅路のゴール。6日間の思い出が一気に溢れ出てきます。仲間と共に、最高の登山チャレンジができました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉積極的に仲間のために声をかけながら、赤城山最高峰を制覇することができた。(小6男)
- 〈協〉自分の班だけでなく、他の班の仲間にも声をかけ続け、登山活動に取り組むことができた。(中1男)
- 〈発〉最後の山に登れたのは、仲間からの助け合いがあったからである。(小6女)
- 〈相〉チームの仲間のために、2Lのポリタンクを持っていてくれた。(小5男)

2. 限界突破キャンプ事業の内容

【ファイナル】旅立ちのステージ

④ ファイナルステージのねらい

全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考えていく。

8月9日 キャンプのまとめ(発表)・お別れパーティ(野外炊事・キャンプファイヤー)



キャンプのまとめでは、6日間で経験したことから学んだことやできるようになったこと、そして今後どのように生かしていきたいかなどについて、しっかりと振り返ることができました。お別れパーティでは、共にやり遂げ、思いを共有してきた仲間と楽しく過ごすために、自分たちで進行や内容を考えながら活動することができました。一人一言の場面では、自然と笑顔、そして涙がこぼれてきました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉 全員でお別れパーティを成功させ、おいしいご飯を作ることができた。(小5男)
- 〈協〉 野外炊事やキャンプファイヤーにおける役割分担を、みんなで考えながら進めることができた。(小6女)
- 〈発〉 初日と比べて、絆や友情が深まっていたことを改めて発見することができた。(中2女)
- 〈相〉 お別れパーティの準備を率先してやってくれた。(小6男)

8月10日 閉会式(振り返り・決意表明)



キャンプ最終日。お世話になった宿泊棟の清掃、心を込めてきれいにしていきました。7日間の振り返りでは、テーマである、「挑戦・協力・発見」について考えたり、キャンプ中に起こった様々なことを思い出したりしながら言葉を綴りました。閉会式では、保護者の皆様に見守られながら、キャンプの全日程を最後までやり抜いたことで得られたこと、そして、その学びを今後の人生にどう生かしていきたいかなどについて、自信に満ち溢れた言葉で堂々と発表しました。これからの生活へと自信を持って旅立っていきました。

【ふりかえりカードから】

- 〈挑〉 1週間で9つの山を登ることができて、自分の自信へとつながった。(小5男)
- 〈協〉 一人ではできないようなことでも、みんなで協力し合えばできるようになることがわかった。(小6男)
- 〈協〉 チームの仲間を助けたり役割を分担したりしながら、協力して取り組むことの大切さを学ぶことができた。(小6女)
- 〈発〉 普通に生活していたら出会えない人たちと一緒に過ごすことで、最高の思い出になったとともに、自分の良さに改めて気づくことができた。(中2男)

3. 調査結果

(1) 自己肯定感とやり抜く力の変容

國學院大學人間開発学部 青木康太郎

破キャンプの教育効果を検証することとしました。

1. はじめに

限界突破キャンプでは参加者の自己肯定感ややり抜く力の育成をねらいとしていたことから、本稿ではそれらの変容に着目し、限界突破キャンプの教育効果について検証を行いました。

自己肯定感の測定には東京都教職員研修センター(2010)が開発した「東京都版自尊感情測定尺度」、やり抜く力の測定には山北ら(2018)が作成した「日本語版子ども用8項目のGrit尺度」を用い、キャンプの事前、事後、1ヶ月後に調査を行いました。分析に当たっては、自己肯定感ややり抜く力の回答を得点化し、それらの平均と標準偏差を基に測定時期間の効果量(cohen's d)を算出して教育効果を検証しました。

(2) キャンプ体験と自己肯定感、やり抜く力の変容

キャンプ体験の多寡で効果量を比較すると、他者協力体験や自己開示体験、自己注目体験(自己肯定感を多くした参加者は、キャンプ後、自己肯定感(d=.24, d=.31, d=.31)、やり抜く力(d=.38, d=.29)が高まる効果がみられました。さらに、自己開示体験と自己注目体験では、1ヶ月後も自己肯定感の効果量(d=.25, d=.27)が認められました。

(3) 人とのかかわりと自己肯定感、やり抜く力の変容

人とのかかわりの多寡から効果量を比較すると、人の役に立っていると感じたことが多かった参加者は、キャンプ後、自己肯定感(d=.23)ややり抜く力(d=.37)が高まる効果がみられ、その効果(d=.35, d=.41)は1ヶ月後も認められました。また、自分のいいところやがんばりを褒められたこと、自分の努力や工夫が認められたことが多かった参加者は自己肯定感(d=.63, d=.43)、人から感謝されたことが多かった参加者はやり抜く力(d=.39)が高まる効果がみられ、それらの効果は1ヶ月後も認められました。

2. 分析結果

(1) 自己肯定感、やり抜く力の変容

自己肯定感とやり抜く力の得点の推移は図1のとおりです。各測定時期間の効果量(d)をみると、自己肯定感、やり抜く力ともに効果量(効果量の目安 .20=小 .50=中 .80=大)が小さく、限界突破キャンプによる教育効果は確認できませんでした。

そこで、キャンプでの様々な体験(挑戦・達成体験、他者協力体験、自己開示体験等)や人とのかかわり(褒められた、感謝された、役に立っている等)を切り口に、それらの多寡から効果量を比較することで、限界突

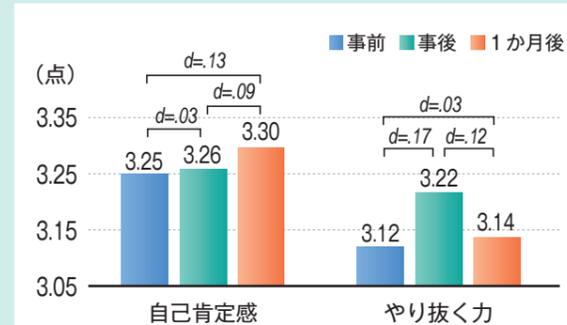


図1. 自己肯定感とやり抜く力の変容

3. まとめ

参加者全体でみた場合、自己肯定感ややり抜く力の教育効果はみられませんでした。他者協力や自己開示といった体験や、人の役に立つ、褒められるといった人とのかかわりを多く経験することで、自己肯定感ややり抜く力が高まる可能性があることが示唆されました。今後、プログラムの改善を検討する際は、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすとともに、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるように活動内容を工夫したり、指導者の関わり方にも留意することが大切だと考えます。

(2) 参加児童の変容

ここでは、ある参加者の行動やふりかえりの記述に注目して、その変容をとらえます。

対象児童:A (小学生・男子)

事前キャンプ

- 行動：オリエンテーションおよび事前説明会で、説明を集中して聞くことが難しい様子で、机に伏したり、目をつぶったりしている様子が見られた。
- 保護者との面談：**落ち着きがなく、興味がないことに集中できない**、との情報が得られた。



本キャンプ

1日目

- Aのふりかえり：感想に「すごく楽しかったけどすごくつかれた」、明日のめあてに「山をおもいっきり楽しむ」と記述があった。

2日目 鍋割山・荒山高原

- 行動①：登山開始直後からすぐに班の最後尾を歩く。数分後には班のメンバーに荷物をすべて持ってもらうよう歩くようになる。その状態で15分程度歩いたところで班付き指導者からグループ全体に問いかけがなされ、5分程度班で話し合ったのち、Aも自身の荷物を持って再度歩き始める。
- 行動②：鍋割山頂上付近で班から遅れて歩くようになる。頂上では先に到着した仲間がAの到着を待っており、到着した際にハイタッチで迎えた。
- Aのふりかえり：〈挑戦〉に「鍋わり山の全て」、〈協力〉に「いきぎれしたときにうしろのかたがたがおうえんしてくれたこと」、感想に「すごくつかれた。そして、たっせいかんがある」と記述があった。
- All for Oneカード：Aに向けて「足がいたい。でも、応援して」と言っていたこと(良かった)」という記述があった。
- 班付き指導者のふりかえり：登りの山で体力的にも精神的にもキツイ子供に対して寄りそい、話を聞き、うまく本音を聞き出せた。

3日目 掃部ヶ岳・榛名富士

- 行動：前日の遅れを考慮し、Aの班が全体の先頭として、さらにAは班の先頭で歩く隊列となった。この日は班から遅れることなく歩き、全体の先頭のままゴールまで歩き切った。また、積極的に「ファイトー！」といった声を出していた。
- Aのふりかえり：感想に「すごく速くゴールできてうれしいです」、明日のめあてに「ちょっと休みたい。テントをうまくはりたい」と記述があった。
- All for Oneカード：Aに向けて「先頭をきって、がんばっていたこと(良かった)」と記述があった。
- 班付き指導者のふりかえり：前日登り坂に苦労していた子を、班の子供たち全員で声をかける雰囲気作りを行い、実践できた。登りに苦労していた子自身にやる気があったから、それに呼応するように雰囲気よくなった。

4日目

- Aのふりかえり：明日のめあてに「山を先頭きってがんばる！」と記述があった。

5日目 鈴ヶ岳・地藏岳・長七郎山

- 行動：Aの班は全体の先頭ではなかったものの、引き続きAは班の先頭で歩く隊列となった。この日は難易度が高い行程であり、ところどころ苦しみ様子が見られたが、そのたびにみずからかけ声を発し、最終的に遅れることなくゴールまでたどりついた。

5日目(つづき)

- Aのふりかえり：〈発見〉に「山を登った時の息のあがりはじめてとき『ファイトーいっばつ』を言うと気持ちがいい」、明日のめあてに「黒檜山をチャレンジしたい！」と記述があった。また、班付き指導者からのフィードバックとして「まずチャレンジしたいと思える気持ちが大事。Aの成長を感じます。Aならできると記述があった。
- All for Oneカード：Aに向けて「大きな声を出し、みんなのふんいきをもりあげた(良かった)」と記述があった。

6日目 黒檜山・駒ヶ岳

- Aのふりかえり：感想に「赤城山の全部の山をせいはできて、よかったです」と記述があった。
- All for Oneカード：Aに向けて「Aのかけごえでみんなが一つにまとまっていったと思いました」と記述があった。

7日目

- Aのふりかえり：明日のめあてに「みんなお別れだけど暗いかおをしない」と記述があった。
- キャンプのまとめ：「みんなで声をかけあったり、協力すれば何でもできる」、「学校でもつらい事があつたら、みんなと同じように協力するためにきずなを深めたい」と記述があった。

1か月後アンケートの記述

- 保護者より：以前のAなら面倒な事、つらい時など途中で「つらい!!」「つかれた!!」など愚痴をこぼす子でしたが、キャンプに参加してからは進んでやり愚痴も口にしなくなったように感じます。限界突破キャンプがとても楽しかったようで、来年も参加したいと言っています。みんなと協力してはげましながら登る山は楽しいそうです。チャレンジする気持ちは以前より大きくなったようです。

考察

キャンプ、特に登山活動を通して、またスタッフの声かけや仲間とのコミュニケーションを通して「挑戦・協力・発見」の体験を積み重ね、前向きで積極的な言動がみられるようになった事例である。

Aは、保護者面談や1か月後アンケート、事前キャンプの様子にもあるように、気分が乗らないことに対して後ろ向きな言動をする傾向があった。

本キャンプにおいては「山を楽しむ」ことが動機となっていたが、2日目に迎えた実際の登山では本人が考えていたより負荷が高かったためか、後ろ向きな行動をとってしまう。そこで班付き指導者の促しにより班員同士が話しあい、Aが自分の気持ちを伝えられたことが、他の班員からの声かけにつながった。鍋割山頂上到着の際の班員の出迎えもあり、大きな達成感を得られたことがうかがえる。

3日目以降は班の先頭でかけ声をしながら登山に取り組み、その行動は班員からも認められるようになった。さらに5日目からは自分が苦しい時に声かけをすることが重要だと考えるようになっていく。

このようなキャンプでの経験をもとに、7日目に行ったキャンプのまとめでは「みんなで声をかけあったり、協力すれば何でもできる」と考えるようになっていく。保護者の1か月後アンケートからは、そのような前向きな言動がキャンプ後も継続されていることがうかがえる。

(3) 援助規範意識・ボランティア活動継続動機および自由記述に関する結果および考察

群馬大学教育学部 岩瀧 大樹

1. はじめに

今回の限界突破キャンプの実施にあたり、本稿では参加した子供たちへの直接的支援を担当したスタッフ（事前；男性4名・女性1名、事後；男性5名、女性1名。すべて20代）の変容について、箱井・高木（1987）による他者の援助に対する心性である「援助規範意識尺度（返済規範意識・自己犠牲規範意識・交換規範意識・弱者救済規範意識の4因子からなる全29項目。本稿では23項目を使用）」、ボランティア活動へのモチベーションに焦点を当てた、妹尾・高木（2003）による「ボランティア活動継続動機測定尺度（自己志向的動機・他者志向的動機・活動志向的動機の3因子からなる全16項目）」を用いて、共に4件法でキャンプ前後におけるアンケート調査を実施した。また、毎日の振り返りとして、子供たちへの関わりでうまくいった点、うまくいかなかった点を取り上げ、自由記述による内省の機会を設定していった。結果を以下に示す。

2. 結果と考察

(1) 心理尺度より

被験者数を踏まえ、敢えて比較検討は割愛したが、ボランティアに対する意識の観点で得点が上昇していた。ボランティア体験により、継続した今後の活動への意識が高まる可能性を改めて検討する必要がある。また、援助規範に関しては、他者からの援助を自分のできる方法で返す、自分のできる範囲を見極めて援助をしていこ

うとする意識へのはたらきかけに影響する可能性がうかがえた。

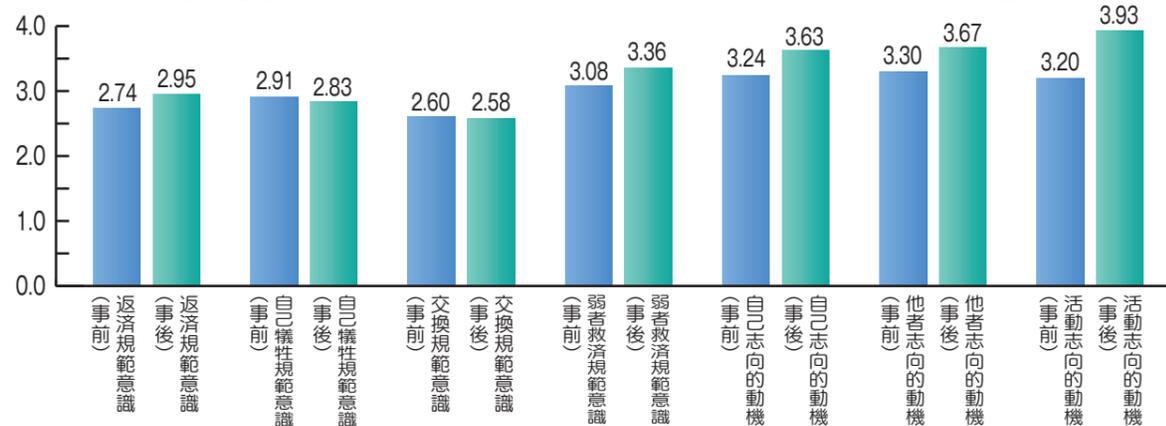
(2) 自由記述より

うまくいった点として、登山などで困ったり、疲れたりしている子供たちへの声かけ、励まし、賞賛などが挙げられていた。子供たちの状況を適切に把握し、必要に応じたサポートが体験において機能していたと推察される。うまくいかなかった点としては、野外炊事やテント設営での安全面や時間厳守に関する指示・指導の方法などコミュニケーションにおける点があげられていた。しかし、スタッフ同士の連携、子供たち各々の特性への理解を深めながらの対応、段取りの確認や工夫などを検討し、上記の課題に取り組み、試行錯誤しつつもブラッシュアップを重ねていた様子が推測された。

(3) 総合考察

子供たちとのコミュニケーションに関する課題を、各々の子供の個性に応じたり、スタッフ同士で情報共有したりすることで、立体的に子供を理解することにより、クリアできていた記述が散見された。また、事前事後オリエンテーションに参加した5名のスタッフの期待と不安に関しては、前者は82%から90%に、後者は48%から18%に変容していた。子供たちの支援を通じて、目の前の課題に気づき、協力して取り組むことで、ボランティア活動を充実させていたと推察できる。

援助規範意識・ボランティア活動継続動機のキャンプ事前・事後の平均値



(1) 1か月後の参加者アンケート結果

- ①苦手な教科にも挑戦して取り組むようにしました。うまくいかないときも、ポジティブに考え直してから、またがんばってみました。
- ②応援の言葉は大事ということを学んで、学校の陸上練習や運動会練習などで、「がんばれー」とか「ファイト!」とか、応援する言葉が増えました。
- ③自分から率先して家事を手伝ったり、勉強机の周りを整理したりと、身の周りの「整備」を中心にやっています。
- ④家で家族にもごはんを作ることができています。特に一番多く作るのは焼きそばです。さっと手を出せるようになりました。

(2) 1か月後の保護者アンケート結果

- ①キャンプ前に比べて、**時間を考えて行動することができるようになった**と感じています。放課後や休日に時計を持ち歩くようになりました。また、身の回りの整理整頓も以前に比べできるようになりました。忙しさを忘れてしまうこともありますが、洗濯物をたたむだけで終わりにせず、しまうことをやってくれたり、妹や弟に声をかけてくれたりすることも多くなりました。
- ②**中学生の先輩やボランティアの方から、たくさんの姿勢を学び影響を受けた**ようでした。「いつか赤城で班付きリーダーになりたい!」と子供が言っているように、ボランティアさんが子供たちの憧れの存在だったようです。その夢がいつか叶うよう、自然や人を大切にできる温かい子に育てていこうと考えています。
- ③**自己肯定感がアップした**気がします。子供本人が「僕って他の子とちょっと…」と自覚はしていたものの、学校生活では集団の中での居場所探して失敗の連続。しかし、キャンプ後ではどこか堂々としている気がします。「僕はこのままでいいんだ」と腑に落ちたのかもしれません。



(1) 成果

- ・毎日、「挑戦・協力・発見」の振り返りを行ったことで、自分自身の目標について意識することができ、明日のめあてを考える手立てとなった。
- ・毎日、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらった「All for One（一人のために）」の振り返りを行ったことで、自己存在感や仲間のために役立っているという実感を得ることができた。
- ・キャンプの様子を、取材協力していただいた群馬テレビのニュース番組で3回放映したり、その映像（YouTube）を本所のホームページ上で配信したりすることで、参加者の保護者等に頑張っている活動の様子を届けることができた。
- ・23名全員が総距離約50km、累積標高差約3,000mの9つの山を登頂することができた。
- ・メインプログラムである9つの山の登山に挑戦する中で、やり抜く力が高まる効果が見られた。

(2) 課題

- ・自己肯定感を高めていくために、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすとともに、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるような活動内容を検討し、それらの体験について毎日振り返ることで、次の活動に生かしていく。
- ・本事業で自己肯定感の教育効果が上がらなかった理由としては、チームの人たちと力を合わせて事に当たるという野外炊事やテント泊等の協同場面が足りなかったのではないかと考える。
- ・1か月後の保護者アンケート③にもある通り、個の目標や特性、実態を把握しながら支援を行う必要があるため、子供や保護者との面談、生活での声かけ、「振り返りの時間」の持ち方、指導者同士の情報共有の仕方などを検討する。
- ・ボランティアの調査結果（自由記述）にもある通り、安全面の指導方法や生活面での指示の仕方など、子供たちとのコミュニケーションにおいて工夫していくことが必要なので、さらなる指導者同士の連携や声かけの仕方などを検討する。

(3) 推進委員より（五十音順）

「子供たちの心や人間性をはぐくむ限界突破キャンプ」

國學院大学人間開発学部 准教授 青木康太郎 氏

推進委員の一人として、自己肯定感ややり抜く力の調査を担当させていただきました。残念ながらキャンプを直接見に行けなかったのですが、後日撮影した動画を見ると、仲間と励まし合いながら山頂に向かってがんばっている様子や日を追うごとにたくましくなっていく子供たちの姿が印象的で、限界突破キャンプを通じて子供たちの心や人間性が大きく成長したことがよく分かりました。キャンプは、自然、プログラム、人で構成されるといわれますが、今年の限界突破キャンプは、赤城山という豊かな自然に加え、考えられたプログラムデザイン、素敵なキャンパー、リーダー、スタッフなど、いい条件に恵まれたキャンプだったのではないかと思います。今後、次年度に向けて検討が始まると思いますが、来年はどういった限界突破キャンプになるのか、今からとても楽しみです。

「上毛三山制覇へ向けて」

群馬県立妙義青少年自然の家 社会教育主事 青山 裕也 氏

限界突破キャンプのスタートである「事前キャンプ」に参加しました。初めて会う仲間と1日過ごし、心と体が少しほぐれた様子が見られた中、これから始まる7泊8日の登山練習が2日目に行われました。当日は、あいにくの空模様で朝から雨が降っていました。しかし、迷うことなく赤城不動大滝へのトレッキングを決行しました。それができるのも、事前の実地調査やスタッフの情報共有など事前準備がしっかりできていたからだと思えます。「雨=中止」にするのではなく、雨天時のルートや安全確保を十分に行えば実施できることを改めて実感しました。それと同時に「次は天気の良い日に行ってみたい」という意欲も湧いてきました。

2020年度は、いよいよ「妙義」が舞台となります。上毛三山制覇のお手伝いができることを今から楽しみにしています。

「ピアによるさらなる学びへ」

群馬大学教育学部 准教授 岩瀧 大樹 氏

今年度は子供たちを支えるボランティアの成長という観点から関わらせていただきました。このキャンプは、来てくれた子供たち同士で協力し、助け合うことで「できる」という感覚を伸ばす貴重なものです。しかし、その体験をより有意義にさせているのが、子供たちにとってのお兄さん、お姉さんたちの関わりだといえます。

子供たちは、まさに「自分とは何か」という課題を少しずつ見つけ、模索しつつある段階にいます。自身で失敗や成功を繰り返すことは大切です。でも、身近なお兄さんやお姉さんたちの存在や奮闘は、彼らにとってかけがえのないモデルになったと確信しています。また、彼らもボランティアが様々なことに気づききっかけを与えてくれました。

今後も子供たち同士、そして子供たちとボランティアのピアでの学びが続くことを期待しています。

(4) 事業担当・ボランティアより

「人とのつながり」

企画指導専門職 田村 文明

昨年度の限界突破キャンプは副担当として、本年度は主担当としてこの事業に携わることができ、とても光栄に思っています。「自分の力をためしたい」「新たな自分と出会いたい」、今年で2年目になったこのキャンプには、そんな様々な思いを持った小学5年生～中学2年生の児童生徒 23 名が参加しました。今年のテーマは、「自己肯定感」です。子供たちの思いに応え、自己肯定感を高めるために、具体的な手立てとして次のことに取り組みました。

1つ目は、「プログラムデザイン」の工夫です。前半は、仲間作りや野外炊事等で仲間意識を高め、後半は、総距離約50km、累積標高差約3,000mある9つの山を制覇するという困難なことに挑戦する体験をすることで、段階的に自己肯定感を高めるねらいに迫るプログラムにしました。

2つ目は、「振り返りの時間」の充実です。自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらい「All for One (一人のために)」を取り入れました。肯定的なかかわり合いがあったことで、自己存在感や仲間のために役に立っているなどの実感を得ることができ、自信を持って取り組める力を高めたと考えています。

子供たちにとって、このような体験活動は「楽苦美」であったと信じています。楽しいこと、苦しいことをみんなで分かち合っていくと、あとで振り返ると美しい日々だったと思える。今後、「人とのつながり」を大切にしたい子供たちが、日本の未来を創っていくのだらうと思います。この事業にあたりご協力いただいた関係各位の皆様、保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。

「心と体の準備」

企画指導専門職 奈良 貢

今年度、初めてキャンプに関わらせて頂いて、改めて心と体の準備の大切さを感じました。

まずプログラムを自分達で体験すること。ボランティアと連携すること。そして、参加者や保護者の声に耳を傾けること。

心と体の準備を重ねていくことで、このキャンプに携わった全ての人にとって、よりこの経験が大きな意味を持つと感じました。これらの経験が、参加者の大きな自信となり、成長を後押ししていくことを期待しています。

「チーム限界突破」

事業推進係員 山川 晃

限界突破キャンプを開催するために、キャンプの教育目標とプログラム設計についての議論や、行程と注意箇所を確認するための実地踏査、ボランティアとの事前研修など、多くの時間を使って準備してきました。そのような準備を通して、各スタッフが明確な役割を持ち、かつ目標を共有したひとつのチームとしてキャンプを運営することができました。これからも、キャンプの前から良い準備を積み重ね、より良いキャンプを作っていきたいと考えています。

「ボランティアリーダーとして」

群馬大学3年 山本 周吾

今回の限界突破キャンプは2回目の参加となり、ボランティアリーダーという役割で、全体の司会や進行、子供たちへの連絡を伝えることなど多くのことが経験できました。その中で、子供同士の関係性などの全体を見る力を付けられたように思います。運営の職員が決めるのではなく、ボランティアや子供たちに判断を委ねる場面も多く、「どうすれば子供たちにとって一番いいのか」ということを深く考えることができました。

「子供たち一人一人とのコミュニケーションを通して」

新潟大学4年 乙坂まりん

限界突破キャンプでは、登山や野外炊飯などの活動の中で、子供たち一人一人との密なコミュニケーションに努めました。密なコミュニケーションは、子供たちの小さな変化への気づきに繋がることを改めて実感しました。コミュニケーションを重視し、長期で小中学生と共にキャンプをしたことで、個性の細かな理解と、その時々合ったメリハリのある関わりができるようになりました。今後もそのような関わりをしていきたいと思っています。

「寄り添うこと」

上越教育大学大学院1年 松本 直樹

私は「寄り添う」という言葉が苦手です。「子供に寄り添う」とよく耳にしますが、「寄り添うって何？」と聞くと曖昧な回答がくることが多いからです。ですが、このキャンプで考えが変わりました。相手のことを思いやり、先のこと考えた対応。褒めたことも注意したこともありましたが、そのどれもが温かく感じました。スタッフの方の対応、子供たち同士のやりとりのなかに「寄り添う」ことの本質が見えたような気がします。

「子供たちの言動から得る学び」

大東文化大学大学院2年 浅川 健太

私にとって限界突破キャンプは、忘れかけていた大切なものを思い出させてくれるものとなりました。例えば、辛い山登りで仲間を思いやる声かけを送る子から、他者を思いやり行動する大切さについて改めて気づかせて貰いました。このような登山中の辛い時でも仲間に声をかける子たちの姿に強く心を打たれ、自分も同じようにありたいという思いから、相手のために何ができるか考えて行動する機会が増えるようになりました。

「視点の違いを学ぶ」

神奈川大学3年 岡部 和希

登山中ある女の子が「あとどのくらいで頂上？」と聞いてきたので「あと少しだよ」と答えました。その後10分くらいで「全然少しじゃないじゃん！」とその女の子が怒り出してしまいました。その時、自分にとってはあと少しでも子供たちからしてみれば長い距離なのだと思われました。当然のことなのですが、大人と子供では見えている景色が違うのだと実感しました。これからは子供の目線に合わせて寄り添っていきたいと思います。

「子供の成長とともに…」

亜細亜大学3年 中澤 諒哉

私は、人から吸収する力を身につけました。このキャンプが初めてのボランティアだったので、子供たちはもちろん、他のボランティアを見ながら、どうしたら効率よく動けるのかを考えながら過ごしました。班付きではなく、子供の指導もしたことがなかったので、先輩ボラの指導や話口調を見たり聞いたりする機会が多く自分の中で手本としていました。これから初めての経験はたくさんあると思うので、この経験を生かして自分自身をもっと成長させていきたいです。

御支援をいただいた皆様

本事業を実施するにあたり、たくさん関係機関や推進委員の皆様のおかげで事業が無事に終わることができました。心より感謝申し上げます。

- 募集協力
上毛新聞社：新聞掲載日～6月16日(日)
- 取材協力
群馬テレビ：放送日～①8月3日(土) ②8月7日(水) ③8月22日(木)
- 後援
群馬県教育委員会・前橋市教育委員会